

定
散
料
簡
義

底本
対校本

* 西 翻

「浄土宗西山派秘要藏」所収本（大谷大学所蔵）
「西山教義研究」第二号所収本（昭和十一年発行）
本文中のゴシック体の文字と（ ）内の文字とは編者加筆

定散料簡三重六義大意の事

西山上人御法語^①

一、大意

此の門の大意は、欣淨の一段を以て一經の惣体とす。諸經・今經^②の不同を分別して、通別の五文^③を以て定散二善として、三重六義の異^{ミト}なりあることを料簡するなり。

觀經を料簡するは定散を料簡するなり。定散を料簡するは念仏を料簡するなり。定散に三重六義あれば、念仏に又三重六義有るべし。

二、問答料簡

第一番問答

問ひて云く。表章には「定散^{註1}二善通別有異」と云ひて、正釈には「通別有異」の詞を略する事、如何。

① 西山上人御法語「沙門證空述」

② 綱圖今經「觀經」

③ 綱圖五文「五門」

註1 觀經疏玄義分七門料簡

註2 觀經疏玄義分定散料簡門

答へて云く。表章は一門の始終を抜き出だして大意を演ぶるなり。故に玄義・依文の二義を存して「定散二善通別有異」と云ふ。玄義に依れば、定散二善は通別の五文に有り。依文に約すれば、十六観定散は欣浄の五文より起る。故に序分・正宗を差別して「通別有異」と云ふなり。

今の正積は、玄義・依文に通ずる所の定散の法に付きて三重六義有ることを料簡す。故に「通別有異」の詞を略して、ただ「即有其六」と云ふなり。是則ち此の経の定散、諸経（の定散）に異なるを分別せむときは、通別の五文を以て、其註をはかせとして心得べきなり。次に所説の定散の出所を問ふには「有通有別」と云ひて、先づ五文を出だして、次に十六観を以て定散兩門の義を答ふと積するなり。

① 關玄義「玄義に」

② 關國五文「五門」

③ 關國五文「五門」

④ 關國五文「五門」

⑤ 關其を「其」

註「はかせ」は博士（規矩）の意

⑥ 關問ふには「問には」

⑦ 關國五文「五門」

(定散の) 三重六義 (の) 事

一、総説

三重は、能請・所請一重、能説・所説二重、能為・所為三重なり。

此の三重に、各、能・所有りて六義となるなり。

今此の三重を經に配當せば、第一重は序分、第二・第三の重は正宗なり。

二、問答料簡

第一番問答

問ひて云く。十六觀を以て第二重とすると云はば、能為・所為は正宗の外に有るべしと聞ゆ、如何。

答へて云く。此に三の義あり。一には能為・所為は得益・流通なり。二には正宗に付きて、廢立を以て第二重とし、ぎょうじょう行成を以て第三重とす。三には觀仏三昧の法を以て第二重とし、觀仏即念仏に歸する定散の機を以て第三重とす。

① 圓の重はなし

第二番問答

問ひて云く。此の答、三義ともに不審なり。其の故は、先づ得益・流通を以て第三重とせば、今、三重六義は定散の差別を料簡す。凡そ得益・流通は定散十六観の外に有るべからず。

又廃立行成を以て第二・第三の重とすると云ふこと、是又、^②廃立・行成共に正宗に之を説く。何ぞ又十六観の外に行成の義を立するや。

又機法共に正宗に有り。何ぞ十六観を離れて念仏の機を論ぜんや。

答へて云く。法在ほうざい一心いっしんの時ときは、通別④の五文ごぶんも、序・正・流通の三段も、実には一なり。然るを説せつ必次第せつじだいの義ぎを存する時は、序・正に各差別あり。今、廃立・行成を以て第二・第三の重とすることは、正宗の中に付きて、観門あり、(三心あり)。観門は智慧、三心は信心なり。観門は十六観に亘りて定散の行を廃して念仏の一行を立す。阿弥陀仏、余行を以て本願とせず、只、名号を以て本願とする故に。(定

① 關は「も」

② 關是「見(へず)」

③ 關又「なし」

④ 關五文「五門」

善) 十三観の中には「念仏衆生撰取不捨」^{註1}と説きて、観仏の行を簡
びて撰取の益とせず。(散善) 三輩観の中には、聞経と称仏との滅
罪の多少を説きて、化仏の述嘆・念仏の功を論ずる文に聞経の事を
論ぜず。或は「依下観門専心念仏」^{註2}と釈し、或は「定散文中唯標專
念名号得生」^{註3}と釈するなり。皆是れ観門の智恵、廃立の義なり。

三心は一経に亘りて定散を成じて往生の行とす。其の故は、能請・
所請の位にては諸経に説くが如し。定散・念仏混乱して本願・非本
願の体あらはれず。故に能説・所説の(位に於ては)観門の智恵を
以て、念仏三昧の功能、定散の上の他力の一行なる事を取り出ださ
ん為に、暫く廃立の義を存すれども、既に念仏の体頭はれぬる上
に、所説の定散、本より報仏の功德なる故に正因となる。故に三心
を自問自徴して定散の行を成ずるなり。故に三輩観の中には「復有
三種衆生当得往生」^{註4}と説きて、世・戒・行の三福を往生の行とする
なり。弥陀の化仏の讚嘆も、華開の得益を成ず。微少の世善なほ成

註1 観経真身観の文

① 經四簡「選」

② 國論する「論の」又は「論ずる」
の二つをあげている。

註2 観経疏序分義定善示観縁の釈

註3 観経疏定善義真身観の釈

③ 四に「に於て」

註4 観経上品上生の文

④ 國を「なし」

⑤ 國する「なる」

⑥ 國の「も」又は「の」の二つを
あげている。

⑦ 「も」

ず、況んや甚深の定善に於てをや。故に定善は即ち思惟の位にて現身に報仏をみて三昧の行を成ず。皆是れ三心を以て行成の義とし、能為・所為とするなり。是を廃する時は勝より劣をすて、是を立する時は劣より勝を取るなり。

又機法を以て第二・第三の重とすとは、次下に「定散^{註1}二善出在何文」とは能説・所説をさす。之を答ふるに、二義を以て十六観をあらはす。「今既教備不虛何機得受^{註2}」とは能為・所為を問ふなり。之を答ふるに「一心信樂求願往生上尽一形下收十念乘仏願力莫不皆往此即答上何機得受義竟^{註3}」といへり。第二・第三の義、機・法なりと云ふこと、此の釈（に）分明なり。

但し機法はなるる事なければ二重とすべきに非ざれども、此の經の機法の説相遙かに（諸經の機法に）異なるなり。其の故は正宗に付きて（他力の觀門を）成ずることを能説・所説の重とし、定散・善惡の衆機、三心によりて念仏の機となることを得るなり。此の位

① 國國善「散」

② 國國し「す」

註1 定散料簡門の釈

註2 定散料簡門の釈

註3 定散料簡門の釈

③ 國國こと「ことを」

を頭はして能為・所為の重とするなり。

第三番問答

問ひて云く。能請等の六義各に定散有りと云ふこと、如何。

答へて云く。(一)、能請の定散は先に云ふが如し。韋提、所求

の土を選び取りて、願力成就の功徳を領解すれば、定散等しく生る謂れ有るなり。故に定機に返りて定善を請ふと云へども更に散善をへだつることなし。故に思惟の句の底に皆散善を含むなり。然る間、能請の定散は定善を面として散善をうらにせり。

註¹

観仏・念仏の両三昧あり。十六観を以て即ち観仏三昧とす。然るに此の観門の智恵は、定散の行を廃して念仏の行を立すれば、定散(の機)は即ち仏の本願に乗じて往生をうる、(定散の機が)念仏の機となることは、三心を具するによるなり。(これは)「若有衆生願生彼國者發三種心即便往生乃至具三心者必生」^{註2}

① 願問ひて云く「二」。

② 願各「各々」

③ 願答えて云く「答」

④ 願「答ふ」

④ 願更「更」

⑤ 願善「なし」

註¹ 以下の十行は他よりの混入かと思はる故に且く一字下げてワクに包む。能為所為の事について語れり。

註² 観經上品上生の文

「彼国」と説く（ところの）自説の三心より成ず。是は「能^{註1}為即
 是如来」と云ふ事を明かすなり。三心すでに具しぬれば願行即
 ち成ずる故に、定散の機ことごとく生ずることを得るを以て、
 「所^{註2}為即是韋提等是也」と明かすと云ふなり。是則ち定善に示
 す観、散善に通じて、定散皆観仏三昧の義なり。

一、所請の世尊は、能請の韋提の發起を微笑して、未來の衆生の
 為に三福散善を開す。散善即ち報土の因なる事を許せば、定善、往
 生の行なるべき事、理在^{りざい、ぜつこん}絶言なり。故に所請の位には散善を面とし
 て定善^{註3}をうらに含むなり。

一、能説の定散は、定散皆仏の自説となるなり。其の故は、所請
 の位は、自説、散善にかぎりて定善には通ぜず。能説の如来は、第
 十七の願より起りて出世の本意を顕はして、韋提の別去行（の請）
 に付きて他力の観を示す時、定散等しく説を以て見を成ずべき謂れ

① 能は「を」

註1 定散料簡門の釈

② 三心すでに「今に」

註2 定散料簡門の釈

③ 定善なし

(に)したたまりて十六觀と説く故に、定も散も共に仏の自説となるなり。説人門に「今此觀經是仏自説」といへる、是れ能説の体なり。

一、所説の定散は、定散皆能觀の機にもたして、所説の境に向へば、依正皆願力所成なる故に、定散は弘願を顯はず能詮と成りて、所詮の念仏に帰す。「依下觀門專心念仏注想西方念々罪除故清淨也」と釈する、此の意なり。能觀の定散は所説の境に約して廢立を本とするなり。

問ひて云く。此の能説・所説共に廢立なりと云ふ、其の能・所の差別、如何。

答へて云く。此に二義あり。能説の廢立は釈迦に約し、所説の廢立は弥陀に約す。

初めに能説の廢立を釈迦に約すとは、十方の中には西方、諸仏の中には弥陀、万行の中には念仏なり。定散の諸善を廢して念仏の一行を立するなり。所謂「汝好持是語」^{註2}是なり。

註1 觀經序分義定善示觀緣の釈

註2 觀經流通分の文

所説の廢立は弥陀に約すとは、所觀の境に付きて通別・真仮・依正等の不同有りと云へども、依報は正報にうつり、仮觀は真觀と成りて、別正報の弥陀、真身觀を体とす。是に付きて色相あり、名号あり。然るに阿弥陀仏の色相を觀する觀門を廢して、ただ名号を稱する稱名の者を照撰し玉ふ。所謂「^{註1}光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨」の仏体の上に於て、弥陀自ら廢立の義を立て、「^{註2}乃至十念若不生者不取正覺」の願成ずる酬因の身なれば、釈迦の廢立も此より眞実と成り、諸仏の証誠も此より決定して起るなり。

一、能為の定散とは、定散皆念仏に納まりて、名号の外に得生の行を論ぜず。其の故は、能為は三心なり、三心に付きて心と善と二あり、心とは至誠等の三心なり。善とは至誠心の中の三業眞実の善、深心中の正助二行の善、廻向發願心の過去・今生の自他・凡聖の善なり。然るに至誠心は深心にうつり、深心は廻向發願心に落居して、其の体終に南無の二字に極まれば、三心の中に成ぜらるる

註1 觀經真身觀の文

註2 大經第十八願の文

処の定散の功能は、源みなもと、報仏の功德なる故に名号の中に撰在せられて、南無阿弥陀仏と云はれて、願行具足の義を成ずるなり。^{註1}

念仏①（の三重）六義（の）事

総説

問ひて云く。念仏の三重六義、如何。

答へて云く。觀經の意は、定散と念仏と互に離るる事無き故に、定散に三重六義あれば、念仏何ぞ此の謂れなからむ。

先づ三重とは、能請・（所請）の位は、諸經の意を引きて此の經の序分に撰するが故に、念仏と定散と混乱して、定機の為には觀念の念となり、散機の為には散心の称名となる。

能説・所説の念仏とは、先に云ふが如し。觀門の智慧（を以て）定散の行を廃して弘願の行に帰する故に、本願の名号は非定・非散なれば、定散の上の他力の一行を説き顯はすなり。

註1 この次に

「一、所為の定散には」の一段あるべきか。但し今欠けて無し。意を得て察すべし。

① 國國念仏（の三重）六義（の）事 〳

〳 念仏六義事 〳

能為・所為の位は、是又、先の如し。三心を發得して願行具足の義成ずる上に、仏果の正因即衆生の正因なることを顯はして、念仏に撰在せらるる處の報仏の功徳を説き出だして、正因・正行の二義を成ずる故に、正因の上には正行をかさね、正行の意義には念仏を含みて、念仏と定散と互具する事を得るなり。

六 義

能請の位とは、定を本として散をかぬ。故に散心の称名を簡びて観念の念を取る。是則ち諸經^①所説の意なり。

所請の位とは、未來の散機を撰せん為に、散を本として定をかぬ。又観念・称名の中には称名を以て本とす。礼讚^{註1}の前序に文殊般若の一行三昧を引きて「不観相貌專称名字即於念中得見彼阿弥陀仏及一切仏等」と云へり。又「何故不令作観直遣專称名字者有何意也」と問ひて、^{註3}「乃由衆生障重境細心麤識毳神飛觀難成就也是以大聖悲憐直勸專称名字正由称名易故相統即生」と云へるは此の位なり。

① 經所「諸」

② 「諸（所か）」

註1 往生礼讚

註2 往生礼讚

註3 往生礼讚

能説の位とは、釈迦に約す。「註上來雖説定散兩門之益望仏本願意在衆生一向專稱弥陀仏名」と云ひて、定散を廢し念仏を立する義、此の位なり。

所説の位とは、弥陀に約す。其の故は、所説に付きて能觀あり所觀あり、境に付きて觀仏あり念仏あり。然るに彼の仏の功德、念仏を以て本とする故に、弥陀自ら觀仏の行を廢して稱名の行を立す。念仏の諸行に秀でたる事、此の位なり。

能為の位とは、能為は是れ三心なり。三心とは行を成ずる信心なり。前に云ふが如し。能成の三心は南無の心となり、所成の定散は名号の中に納まりて、南無阿弥陀仏と落居して、一向專念の義を成ずる、此の位なり。

所為の位とは、又先に云ふが如し。一經の定散は名号の中より説き出だされて、定散各機おのおのに隨ひて成ずることを得るに依りて、念仏三昧の功德に惣ねて、比較すべき善なし。一切の諸惡は滅して一切

註 觀經疏散善義流通分の積

① 圓でニなし
圖「ハ」

の善は成ず、念仏の利益は此の位に顕はれはつる者なり。

①、定散二善因誰致請事

問¹曰定散二善因誰致請

答曰定善一門韋提致請散善一門是仏自説

此の問答は能請・所請の問答なり。其の故は「料簡定散兩門即有其六」と云ひて「^{註3}一明能請者即是韋提」と云へば、韋提即ち定散を請すと心得べきが故に、「定散二善因誰致請」と問ひて、「定善一門韋提致請散善一門是仏自説」等と積し顯はすなり。而るを諸師は思惟正受を定散と（心）得て、定散ともに韋提の請と積する故に、如来の自説の体あらはれずして、未来の教を成ぜず。今師は二請有りと雖も、唯是れ定善なり^②。又散善の文は都て請す処無し。但是れ仏の自開の旨を得玉ひて、散機を本として未来を体とす。觀經の諸經にかはれる事、此の能請・所請の得やうによるべし。故に一經^③の法体、六義の始終、此の重に有るなり。知るべし。

① 經一、定散……請事。「定散二善因誰致請事」

② 「一。定散の二善誰が請を致すに因る事。」

註1 定散料簡門の第一問答。

註2 定散料簡門の積

註3 定散料簡門の積

② 隱なりはなし

③ 西經は「仏」

(二)、未審定散二善等の事

問曰、未審定散二善出在何文、今既教備不虛何機得受

答曰、解有二義、一者謗法与無信入難及非人此等不受也、乃至此即答上何機得受義竟、二出在何文者即有通有別、言通者乃至言別者乃至雖有二義不同答上別竟

第二の問答は、第二・第三の重を問答し顯はすなり。「定散二善出在何文」とは所説の法を問ふ。「今既教備不虛何機得受」と(は所彼の機を問ふ。斯くの如く)問ひて是を答ふるに「解有二義」と云ひて、問に二の心有る故に、答に又二の意有りとなり。「一者謗法」と云ふより下「乘仏願力莫不皆往」に至るまでは能為・所為の重を答ふ。「二者出在何文」と云ふより「雖有二義不同(答上別竟)」と云ふまでは、能説・所説の重を問ひ顯はすなり。

問ひて云く。「出在何文」とは所説の定散を問ふなり。而るに所説には正宗十六觀の文を引くべし。五文とは通所求・別所求・光台、

註 定散料簡門の第二問答。

① 顯重「二重」

② 國謗法「謗法者」

③ 國國何文「何文者」

此の三は所求にして非定・非散なり。通去行・別去行は、唯定にして散善にあらず、何故ぞ此の文を引きて定散の注文とするや。

答へて云く。五文を引きて定散の注文とするに付きて二義有るなり。一には玄義の義と、二には依文の義となり。

玄義の義とは、玄義は是れ弥陀の教、能化に約して発起の本意を論ず。即ち五文の中に、先づ通所求通去行を請するは、後の三文を起して滅後の教を成ずるなり。『観念法門』に厭苦縁の文より欣淨縁の通去行の文まで引きて「非直夫人^①心至見仏亦与未来凡夫起教」と云へり。所謂、未来の教とは十六観門なり。通所求通去行は皆定散の文となるなり。

光台とは通所求を答へて、説かずして現ずる事、弥陀の功德十方の淨穢二土に成ずる故に、积尊第十七願より起りて、広く淨土の法門を開くべき二尊教の法体を見せしめん為なり。^註「諸仏如来有異方便令汝得見」と説く、此の意なり。其の異方便とは『般舟讚』に

① 觀國夫人「草提」

② 觀國答へて「挙げて」

註 觀經序分定善示觀縁の文

「定散俱廻入宝国、即是如来異方便」と積する故に、光台に定散あり。

別所求とは、韋提光台の中に於て、九方を捨て（て）西方を選び取る。一經の定散諸善を成ずる根源、此の別所求より起れり。其の故（は）經釈に分明なり^①。先づ積に付きて是を明らめば「七從我今樂生弥陀、乃至、依報感成極樂」文、所謂、勝因・勝行とは定散なり。願々皆発とは別願なり。故に弥陀の本願は定散因行によりて成じ、定散因行は弥陀の本願によりて成ず。此の故に彼土の功德・彼仏の正覺とは、凡夫引接の誓願を以て、定散の因行を修行して、依正二報の莊嚴を成就し玉へり。是により（て）今經所説の定散とは、源^③、源、弥陀の因行を説き出だして、定機の為には定をあたへ、散機の為には散を授け、定散皆報仏の功德として報土の正因となるなり。諸仏の、此の界に出現し玉ふ事は、此の事を説かん為なり。積に云く、
「諸余經典勸勉弥多衆聖齊心皆同指讚有此因緣致使如来密遣夫人別

① 闡明「別」の横に「明か」の註あり。

註1 觀經疏序分義欣淨縁の文

② 闡所謂「所」云

③ 闡源「原」と

註2 觀經疏序分義欣淨縁の積

選也」と云へるは此の意なり。

又經に就きて是を明らめば「諦觀彼國淨業成者」と云へり。此の中に彼國とは所求をさす。淨業とは定散を指す。韋提の爲には「我今爲汝広説衆譬」と説き、未來の爲には「欲生彼國者當修三福」と説く。但し淨業の詞は定散に通ずと云へども今（は）散善を抑ふ。三福を説き了りて「此三種業過去未來現在三世諸仏淨業正因」と説く故に。三世諸仏とは、正宗には「諸仏如來是法界身」と説きて阿彌陀仏是なり。彼國の淨業を定散と説き出だす事を意得れば、定散は正しく別所求に有るなり。

別去行とは、韋提所求の土を選び取りて彌陀の功德を見入れば、定散皆彼仏の因行にして淨土の生因なる事を領解す。微少の世善なほ成ず、何況んや甚深の定善に於てをや。故に通去行に替りて初めて別去行を請する思惟の句の底に散善を含むによりて、別去行に又定散あり。ここを以て文にさきだつ玄義の意によれば、欣淨の外に一經

① 圓云へるは「云はるるは」

註1 觀經序分散善顯行緣の文

② 圓指「指」の横に異本に「抑」と註す。

③ 圓韋提「抑も韋提」

註2 散善顯行義の文

註3 散善顯行緣の文

註4 散善顯行緣の文

註5 觀經第八像觀の文

④ 圓圓散「善」

の法体なき故に、五文を定散の文とするなり。

②に依文の義とは、依文は是れ釈迦の教、所化に約して三段を成ず。故に欣浄・正宗の中間に顕行・示観の両縁をふることは、五文に定散有る事を顕はして、十六観ととかるべき領解を立つる基なり。故に其の法体を云へば、別去行に日想観を切續きて、欣浄縁を十六観とは説き移すなり。此くの如く意得れば、顕行・示観の両縁にととのふる処の定散は、上にかへれば通別の五文に亘りて五文皆定散の出文と成るなり。下に取れば正宗と成りて十六観即定散兩門となる。此を以て所説の定散を問はんには必ず五文を以て出文とすべきなり。

(二、定散兩門の義)

從此已下次答定散兩門之義文

問曰云何名定善云何名散善

答曰從日觀下至十三觀已來名為定善、三福九品名為散善

① 摺圖五文「五門」

② 摺二に依文の義とは「(脱か)として挿入している。

註1 「經」の意

③ 四を「と」

④ 四に「と」

⑤ 四を「とを」

⑥ 彌宗「定」

四「受(宗か)」

註2 觀經玄義分定散料簡門の釈

問曰定善之中有何差別、出在何文

答曰出何文者、經言教我思惟教我正受即是其文、言差別者即有二義、一謂思惟、二謂正受乃至雖有二義不同總答上問竟

此の文は上に玄義の心を以て（欣淨の五文を）定散の出文と答ふる上に、五文即定散の文と説き出だす依文の意を以て、十六觀に付きて、十三は定善、三輩は散善と答ふるなり。地觀の文を引くことは、是は別去行を十三觀と説けば觀々に皆此の意有るべしといへども、思惟・正受の觀成を分別すること、第三の觀に明らかかなり。是則ち無漏の寶地を觀ずるは思惟・正受ともに定善なり。但、粗見・了々の二義有るによりて、思惟・正受は定善の中の差別なりと云ふこと明らかかなり。故に此の文を引きて其の証とするなり。

問ひて云く。思惟本より定善ならば、諸師は何ぞ散善と積するや。

答へて云く。諸師の思惟を散善と取ることは、聞・思・修の三恵

① 國漏「垢」

② 國に「なし」

③ 國但「但し」

④ 國は「なし」

を以て仏法を判ずる故なり。「欲界無修上界無思」と説きて、聞・思の二をば欲界散乱の智恵とし、修恵を以ては色・無色の禪定恵とす。正受三昧を以て定善の正体とするが故に、定善の前には方便思惟の位はなほ散善ととらるるなり。

^{註1}又向來解者与諸師不同、諸師將思惟一句用合三福九品以為散善正受一句用通合十六觀以為定善如斯解者將謂不然、何者如華嚴經説、思惟正受者但是三昧之異名与此地觀文同、以斯文証豈得通於散善^{註2}

^{註3}「又向來^①(韋提上請)」已下は文の如し。

初めに「定善^{註4}一門韋提致請散善一門是仏自説」と云へる能請・所請の位に返りて三重六義を結するなり。先に云ふが如し。定散料簡の本意、第一重を本とす。第二・第三の重は此の上に成ずべし。

問ひて云く。散善顯行縁の文を引くに、顯行の二字を略して唯散善縁と引くこと、何の意有りや。

^{註1} 定散料簡門の釈
^{註2} 以上の釈文の意は上の問答中に含まれたものと見るべきか。

^{註3} 「又向來解已下」とあるは、「又向來韋提上請已下」を指すかと思われ。

「又向來韋提上請但言教我觀於清淨業處次下又請言教我思惟正受」

雖有二請唯是定善又散善之文都無請處但是仏自開

次下散善縁の中「説云亦令未來世一切凡夫已下即是其文」

^① 釋云(韋提上請)「解」
^{註4} 定散料簡門の第一問答。

^② 釋云へる「いへり」
^③ 西「云へり」

^④ 西に「なし」

答へて云く。今は定散に対して散をとらむ為なり。頭行は定散に亘る故なり。

注

五重往生の事

一に、法性真如の妙体の処に、仏も成仏し衆生も往生するなり。生仏共に理なれば、彼も此も妨げなし。是は性徳の往生とす。

二に、法蔵菩薩、前の法性真如の理の往生成仏を縁じて、すでに発願して其の証を請ふ時、時に応じて普地六種に震動して決定して必ず無上正覚を成ずべしと唱へし空中の声に、仏も成仏し衆生も往生すべき理り成就す、生仏共に謂れを成ず。

三に、法蔵菩薩、此くの如くにして兆載永劫六度万行を修行して、十劫成道せし時、仏も成仏し衆生も往生すべき謂れ頭は

註 この一段は定散料簡義とは別のものと思われるので且くワクに包む。

① 闕必ず……成ずべし「必定無上正覚」、「定」の側註に「成乎」とあり。

② 西へし「ふべし」

③ 闕如くにして「如くして」

④ 西せし「せん」

れて、仏は修徳に顕はし、衆生は冥に成ず。

四に、三心発る時、即便往生す。此の時、正しく仏も成仏し、衆生も往生す。此の時は仏は冥に成じ、衆生は顕に成ず。

五に、当得往生、是は発三心の上の益を顕はす。捨命の後、正に見仏聞法して即悟無生する時、法蔵菩薩の昔(の)因、衆生往生の今(の)果、全く前後の差別もなく、生仏の迷情もなし。仏も衆生も不二一体にして、遙に凡聖の境を超へ、色身の都を出でて等覚の眠を醒ます位なり。

是によりて衆生の発る心ひとり発らず。仏の成仏によりて発る。仏の成仏又ひとり成ぜず、衆生の発る心より顕はるべし。

本願に云く、「^{註1}設我得仏十方衆生至心信樂欲生我国乃至十念若不生者不取正覺」を此くの如く料簡して五重往生の義を存するなり。

『^{註2}法事讚』は「自利他同断悪不捨怨憎由大悲、有識含靈皆

① 釋國修徳に顕はし、「修に顕徳」

② 釋國時「重」

③ 釋國當「常」

④ 釋國昔「苦(昔か)」

⑤ 釋國「滅」の横に「仏か」と註す。

⑥ 「仏(滅)」

⑦ 釋國眠「眼」

⑧ 釋國發「起」

⑨ 釋國發「起」

註1 大經第十八願の文

註2 法事讚卷下

「普化同因同行至菩提」、『般舟讚』に「十方衆生未曾減、弥陀仏
国亦無増^②」といへる、此の意なり。

此等の積は皆五重に亘りて意得べきなり^③。

① 彌陀に「は」

② 彌陀無「不」

③ 圓べきなり「べし」